

(投稿者)

平園賢一
宇都宮義文
木村悦雄・正子
中柴雅彦
福井 豊
田村和司
和田孝明・幸子
堀 良慶
上村真澄
永津照見
野原 宏
水口英男
太田貞雄
鈴木忠男



(順不同・敬称略)



あーと・わの会 (通称 「わの会」)

62回放談会(ネット上)

日時 2021年 7月吉日
インターネット投稿
参加者 (計16名)



62回放談会－ネット誌上－(順不同)

出品者 平園賢一さん



作家名	伊藤久三郎(いとう きゅうざぶろう)
作品名	「錠」
材料・技法	キャンバス・油彩
制作年	1976年
サイズ	22.0cmX27.3cm

夢を描く画家 伊藤久三郎・最晩年の傑作

2017年11月、横須賀美術館で没後40年展が開催され、私も初期作「オカリナ」を出品させて頂いた。Qのすごさは絵好きなら周知の通りだが、その名はそれほど世間には知られていない。残念だが少し嬉しい。

さて、この作品は新発見と言ってもいいであろうと思われる。1978年の御池画廊で開催された遺作展の出品作だ。

作品集の最後のページに掲載されており絶筆に近い最晩年の傑作だ。Qには珍しい白黒の画面からは病身であった作家自身の死をも予感させる。遺書にも見える封筒には固く錠が掛けられている。鍵はどこにあるのだろうか？

作家略歴 伊藤久三郎 (いとう・きゅうざぶろう/1906～1977年)

京都市生れ。1923年、京都市立美術工芸学校絵画科本科卒。28年上京して「一九三〇年協会」洋画研究所に学ぶ。38年二科の九室会に参加。41年二科会会員。36年新美術家協会に参加、前衛的活動を展開。戦後は京都に戻り、46年行動美術協会結成会員。56年アート・クラブ会員。62～72年成安女子短期大学教授。京都で没、76年京都府美術工芸功労者。71歳。教

出品者 宇都宮義文さん



作家名	小寺健吉（こでら けんきち）
作品名	「瀬戸内海 風早」(カザハヤと読む 地名を題名とした作品)
材料・技法	水彩 厚板紙
制作年	不詳ながら昭和40年前後の作品と推定。厚板紙の鮮度とその木枠取り付け金具の健康状態、作家の年齢から総合判断。
サイズ	縦33cm × 横42cm

私の母の父方の墓が一画に数十基が立ち並ぶ、現松山市元北条市 風早 カザハヤの地の海の景観である。母の遠祖わ、瀬戸内海を征した河野水軍の武将として活躍。この作品わ、わの会で一回だけ行った会員間のオークションで求めた。故郷を遠く離れた身として遠祖墳墓の地の景観の作品であるから即座に入札入手。以来枕元に飾り日夜眺めて居る。但し、淡い色彩の水彩画であるから、画面保護のため、家族の写真を置いて眺めて朝晩たのしんでいる。

瀬戸内海わ、太平洋、日本海をご存知の方からみれば誠に波静かであるが島が多く潮流複雑急で難所があり水軍が活躍するのに適している。しかし、この作品わ作家の個性もあり誠に穏やかに画かれていて心が和む。

画面左の島わ、南北朝時代から祖先の姓に由来する島であると郷土誌にある。中央の山わ、伊予の小富士と言われる姿美しい島である。また左手から伸びる半島わ、私の勤務先の本社と工場群が昭和40年代後半から所在する堀江という土地である。

ところで、作品購入動機が血族の思いに駆られたのであるから、この場を借りて、母の兄弟の絵画、詩作関係の事に若干触れて菩提を弔うことをお許しいただきたい。

(次頁へ)

(前頁より)

母の弟わ若い頃東京で洋画家を志し修行したが結局故郷で銀行勤務。傍ら、故郷の絵画仲間の、藤田ツグジの内弟子になった岡本鉄四郎、児島凡平、須之内徹、他との交流を持っていた。しかし、自分をもっとも解放表現できたのわ、萩原井泉水を中軸に結束した自由律俳句同人の場であろう。

そのことが縁となり、伊予松山で、放浪の俳人種田山頭火終焉の生活を仲間と共に支援した。母の病弱の妹もまた、山頭火の俳句仲間に加わった。ここで、亡き二人の山頭火葬儀直後の告別の句を記す。

弟俳号 汀火骨

露けくお骨ひろうに

まだあたたかなお骨

葬儀一式を取り仕切った仲間の一人としての鮮烈な実感である。

妹俳号 布佐女

病んで山からの

月を見ている

幼少からの病弱病床の身の為葬儀にこの時わ参列もできず家の縁側から月に思いを託す叔母の心情が哀切極まりないのである。話しが湿っぽくなった。

この海でとれる天然鯛の炊き込み鯛めしわ他郷でわ味わ得ないぜっぴんである。また、海より立ちいでる美の根源アフロディーテのことについてわ紙面不足で残念なから割愛。

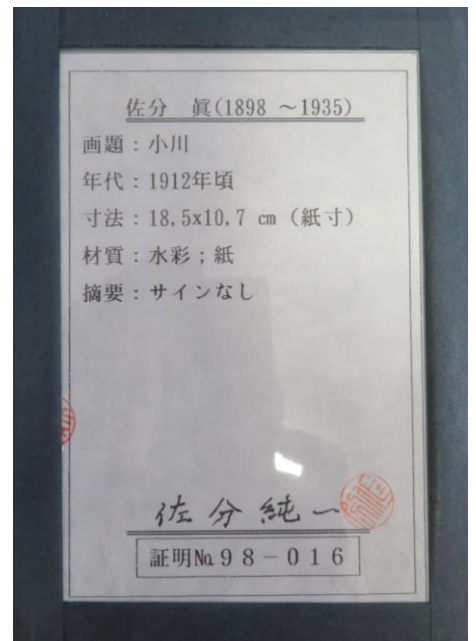
(ふたつの句わ、藤岡照房氏著　ひとみよう、山頭火の一草庵時代　より転用。)

作家略歴 小寺健吉（こでら・けんきち/1887～1977年）岐阜県生れ。1911年東京美術学校西洋画科卒。14年光風会展で今村奨励賞。23年渡仏。24年光風会会員。27年再渡仏。28年帝展で特選。65年画業50年展日本橋三越で開催。風景画を得意とする。70年日展参与。東京で没、90歳。(出典 わ眼)洋画家

出品者 木村悦雄・正子さん



作家名 佐分眞（さぶりまこと）
作品名 「小川」
材料・技法 水彩
制作年 1912年頃
（作家14歳頃の作品）
サイズ 18.5×10.7cm



「絵描きの若書き」というと、その作家のプロになりたての頃の作品を言う。この作品は、佐分眞が十四歳の頃に描いたことになるから、そのような意味の「若書き」とは少し違う。三十七年間の波乱に満ちた佐分の人生に当てはめると、人生における「若書き」とでも言っておこう。二十歳前後の絵描きの入り口の時代の、苦悩溢れる青春をイメージさせる村山槐多、関根正二とかの信濃デッサン系の若書きとも全く違う空気感。田中一村が、親の血を継いでそれこそ一桁代の年齢から画塾に入って描いたものは、絵描きの若書きと言うのか?! いずれにしても、この「小川」は、後に長男の方が発表に当たってつけた仮題?! 日常生活、学業の中で描き残した14歳の時に描いたデッサンの1枚、「上手いな」「達者な筆さばき」「えっ14歳」「早熟」という言葉が似合う「絵描き佐分眞の人生を証明する」のに必要な特段の「若書き」。心地良い空気感を感じさせる佳品。

作家略歴 佐分 眞（さぶり・まこと/1898～1936年）名古屋市生れ。川端画学校に学ぶ。1922年東京美術学校西洋画科卒。25年白日会展で白日賞、後に会員。26年光風会賞、29年会員。27～30年渡仏、グランド・ショミエール研究所に学ぶ。リアリズムに立脚した堅実な画風。31、34、35年帝展で特選。33年東京宝塚劇場で美術部入社、のち美術部長。自死、37歳。87年愛知県立美術館で個展（出典 わ眼）

出品者 中柴雅彦さん



作家名	藤田 嗣治 (ふじた つぐはる)・ レオナルド・フジタ
作品名	「美術館の監視員」 (「キミヨコレクション」)
材料・技法	鉛筆
制作年	1959年頃
サイズ	11×7.5cm



レオナルド・フジタ 「監視員」
油彩/ファイバーボード 1959年 15×15cm ポーラ美術館蔵

この作品の本作は、現在、開催中の『フジター色彩への旅』（4/7～9/5）ポーラ美術館の所蔵作品<監視員>（1959年頃 油彩 15.0cm×15.0cm ファイバーボード）であり、その下図（デッサン）である。ルーブルの『モナリザ』を監視している少年が居眠りをしてる、というとても愛くるしい作品である。藤田嗣治（レオナルド・フジタ）は晩年、沢山の少女、少年を描いている。藤田曰く、「わたしの子供」として・・・。

数多い日本人洋画家の中であって、巨星である藤田もまた、波乱の人生であったことは有名である。若い時、美校卒業後、渡仏し、【エコール・ド・パリ】の一員として芸術の都、パリで一躍脚光を浴びる。奇抜な格好も有名だが、オリエンタルな実力者として高い「名声」を得る。その後南米等世界を渡り、大きなターニングポイントというべきは「従軍画家」或いは「戦争画」の存在である。一説に古典的西洋画法、例えばウジェーヌ・ドラクロアのようなロマン主義的な劇的な作品を試みに制作したとも。しかし戦後、従軍画家の代表的な立場にされ、日本が嫌になりパリに戻り洗礼を受けたという話もある。この時期「終戦記念日」も近く、非常に感慨深いものがある。

美術愛好家にとって、藤田の本画を手に入れたと思う人は少なからずいるが、普通のサラリーマンでは、とても不可能に近い高額で夢のような存在である。そのような存在を藤田が生きていたら、どのように感じていただろうか。そんな藤田でも、彼自身の人生は順風満帆ではない。「わたしの子供」と表現した藤田だが、実際の「我が子」が欲しかったのだらうと私は推測する。当たり前だがどのような人物でも、人生は思うようにはいかないのである。晩年宗教画も多く描いた。それは、単に洗礼を受け敬虔になったからだけであろうか。そこにはルネサンス時の巨星を意識した自尊心と共に、何か彼自身の中に「救われたい」という思いがあったのではなかろうか。近代思想「ニヒリズム」と対極をなしているようにも思われる。人間にとって「ミニマム」(minimum)と思われる幸せが、意外と「マキシマム」(maximum)な幸福ということだろうか・・・。

レオナルド・ダヴィンチの『世界的至宝』の「監視員」の少年に焦点を当てたところも、とてもユーモアがあり、居眠りしていることも心憎い作品で、とても気に入っている。

作家略歴 藤田嗣治（ふじた・つぐはる/1886～1968年）

東京生れ。東京美術学校西洋画科卒。白馬会に入選。1913年渡仏。モディリアニ、スーチンらと交友。33年サロン・ドートンヌ会員。二科会会員。戦争記録画を制作。帝国芸術院会員。55年仏国籍を得る。フランスで没。81歳。（出典 わ眼）

出品者 福井 豊さん



作家名 オーギュスト・ロダン
(原作推定)

Auguste Rodin(仏・1840～1917)

作品名 「少女首像」

材料・技法 ブロンズ・鋳造

制作年 不明

サイズ・重量 H12.5×W12.0×D12.5cm
・1,037g

作者来歴不詳で入手の無銘小品。その後、同形のデッサン用石膏像がロダン作「少女首像」として昔から現在も我が国で市販されていることを知る。しかしその製造者も由来は不明という。荻原守衛や藤川勇造ら作家縁者が持ち帰った部分習作と推測されるが不明で確証がない。像は意思の強さと謎めいた魅惑の表情を併せ持つ。モデルはカミーユかジャンヌダルクかマリアンヌかと妄想は尽きないが、この経緯ご存知の方、是非ご意見ご教示をお願い申し上げる。

＜作家略歴＞1840年パリ生。55～57年装飾美術学校に学ぶ。64年「鼻のつぶれた男」サロン落選。71年ブリュッセルの彫刻家カリエ・ペルーズ助手。75年イタリア旅行。77年「青銅時代」。80年パリ装飾美術館門扉「地獄の門」着手未完。84～88年「カレーの市民」。97年「バルザック像」。1917年ムードンで没、享年77歳。

出品者 田村和司さん

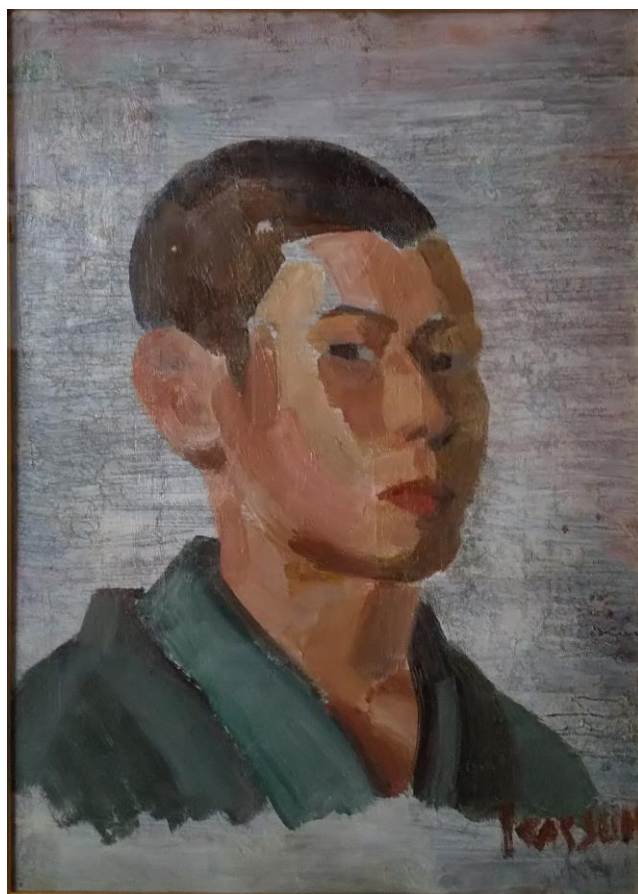


作家名	古茂田守介 (こもだ もりすけ)
作品名	「裸婦」
材料・技法	紙・鉛筆
制作年	不明
サイズ	26X18cm

渋谷の有人画廊に古茂田守助のデッサンがあると聞き妹と見に行った。
ダルマストーブを描いたものとこの裸婦の2点があった。
古茂田らしいストーブの方を私は買うつもりであったが
妹がこの裸婦の方がデッサンとして優れていると言って勧めた。
私は素直に従った。
それは当時、デザインの会社で働き、家では織り機で手織りの作品を作っていた妹
の方がデッサンを見る眼が私より優れていると思ったからである。
今でもこの判断は正しかったと思っている。
その後、デッサンを選ぶ際の判断基準はこの絵によっている。
若い頃の妹との良い思い出である。

作家略歴 古茂田守介 (こもだ・もりすけ/1918～1960年) 愛媛県生れ。1937年上京。
猪熊弦一郎、脇田和に師事。中央大学中退。50年新制作派協会会員。美術団体連合展、
国際具象美術展、日本アンデパンダン展に出品。具象絵画を追究。フォルムの求道者。
東京で没、42歳。(出典 わ眼)

出品者 和田孝明・幸子さん



岩崎勝平読本

作家名	岩崎勝平(いわさき かつひら)
作品名	「自画像」
材料・技法	板・油彩
制作年	1930年頃
サイズ	32.0×24.0cm

本作品は、勝平が25歳頃のものである。色塗りもシンプルで習作であるかもしれないが、愛着を感じる。自画像は、何点か見たことがあるが、多くがこのような表情をしている。何を見つめているのか気になるところである。

裏面には、着物姿の女性二人が、座って作業をしている絵が描かれている。

2014年4月「没後50年岩崎勝平展」が川越市立美術館で開催された。その時の画集「岩崎勝平読本」では、「わの会の眼Ⅱ」に掲載されている「ひじつく」が表紙となっている。

作家略歴 岩崎勝平 (いわさき・かつひら/1905～1964年)
埼玉県川越生れ。1930年東京美術学校西洋画科卒。36年文展鑑査展で選奨。
37年新文展で特選。39年春台展で岡田賞。47年から京橋の蕨山龍泉堂に出入りし、川端康成、川北倫明らと親交する。64年没、59歳。(出典 わ眼)

出品者 堀 良慶 さん



作家名	山崎万亀子 (やまざき・まきこ)
作品名	「めだか」
材料・技法	油彩・キャンバス
制作年	不詳
サイズ	6S(41×41cm)

軍人だった父は久居の航空隊を除隊、軍で体を痛めていたこともあり家業を弟に譲り、東洋紡績に勤めた。私が小学校の頃にはその社宅に住んでいました。

家の前には防火水槽があってそこに魚や水草を入れて楽しんでいました。近くの蛍が住む川で魚をすくって獲った。

獲ったのはフナ、メダカ、金魚です。雷魚は小さな魚は食べられてしまうので水槽に入れなかった。父は釣りも教えてくれました。鯉、ナマズ等大きな魚も水槽に入れました。

父の木刀の素振りはビュンビュンと音を出していました。私はふすまの陰から凄い！と小声で言ったら“この木刀は多くの血を吸っている”と父は言った。その意味は解らなかった。

何時か、私は父との四目置き（ハンディ）の囲碁三番勝負で3連敗を喫し、悔し涙にくれ、父に心の底で反抗するようになった。親孝行出来なかった。デカ頭の情けない子供でした。

父は42歳で亡くなった。葬儀に戦友が来て、“優しい一方で木剣道では誰にも負けない凄腕だった”そして“命を救ってもらった”と私の知らないことを教えてくれ、残された私たち兄弟の学費援助を申し出てくれました。

“めだか”は実に懐かしい思い出です。U氏コレクションの中からこの作品を選んでみました。

過去に山崎万亀子作品に金魚、めだかを記憶していたようです。

作家略歴 山崎万亀子（やまざき・まきこ/生誕年不詳） 汲美で個展。2005年山崎万亀子作品集 私家版 2冊組 彩色葉書付 略歴不詳 13、18年ギャラリーゴトウで個展。11年ギャラリーアビアントで個展 20年ギャラリー「間」成田で陶版画個展。個展中心に発表。洋画家

出品者 永津照見さん



作家名	吉岡憲(よしおか けん)
作品名	「少女」
材料・技法	ペン、墨、紙
制作年	不明
サイズ	18×13cm

良い仕事をするアーティストとは、強い憧れを心に持っているものだと思う。
それを具現化するのに苦闘する。自己凝視に徹するからだ。
この作品は外国人女性を描いたのであろう。深い愛情感じる。
小品のデッサンではあるが、的確な技術、厳しいデッサン力により強さ、大き
さを感じる美しい作品であると思う。

作家略歴 吉岡 憲 (よしおか・けん/1915～1956年)
東京生れ。川端画学校に学ぶ。1935～39年ハルピンに滞在。聖ウラジミール専門学校卒。
39年帰国。43年独立展で独立賞。48年独立美術協会員。49年日本大学芸術学部講師。東
京で没、40歳。(出典 わ眼)

出品者 上村真澄さん

作家名 二見彰一
(ふたみしょういち)
作品名 「星たちのアルペジオ」
材料・技法 銅版画
制作年 1973年
サイズ 29×23cm

「画は理解しようとするのではなく、
音楽を聴くときのように自然に感動を
呼び起こすものだ、と私は思います
二見彰一」



幼いころから天体や星座、海を見るのがお好きでらした二見は、透明な空間を表現する色として青の世界に入っていく。長谷川潔に触発されメゾチントを試みるがアクアチントへ移行。紙の伸び縮みを把握するため版画用紙は常にBFKであるという。
五線譜のような床面に貝殻を配し空には星が輝く。まるで星空コンサートである。アルペジオとは一音ずつ順番に連続的に演奏する分散和音とのこと。画面の譜面通りに演奏するならば、左の星から右の星までつま弾けば美しい和音となるのだろう。

私が小学3年生の頃、ドライブが好きだった父は山形駅の西口に車を横付けし、イルミネーションのような電飾と駅の風景を見せてくれるのが週末恒例行事のひとつだった。日本酒メーカーの「男山」「出羽桜」等の電飾看板が時間ごとに、青・赤・白とリズムカルに色を変え楽しませてくれた。父はおもむろに「北極星を知っているか。北極星はな、位置が動かないから航海する者は北極星の位置を意識すれば迷わなんだ。」と呟き「うん！」と返事をして目の前の電飾がチカチカと輝くのを私は眺めたことを覚えている。あの日の電飾が心の宝箱で星のように瞬き、目を閉じればいつだって溢れんばかりの光に包まれる。ひとつひとつ取り出して夜空に配したなら美しいアルペジオとなることだろう。

あの一番下の脚もとに小さな環（わ）が見えるでしょう、環状星雲ですよ。あの光の環ね、あれを受け取って下さい、僕のまごころです。
(シグナルとシグナレス/宮澤賢治)

この場をお借りしてS氏に心から深謝申し上げます。

作家略歴 二見彰一（ふたみ・しょういち/1932年～）

大阪生れ。1967年春陽会研究賞を受賞。71～88年春陽会会員。73～2011年日本版画協会会員。ドイツ中心にヨーロッパで銅版画家として活躍する。11年神奈川県近代美術館で個展。13年静岡県立美術館で個展。(出典 わ眼)版

出品者 野原 宏さん



作家名	瑛九(えい きゅう)
作品名	「旅人」
材料・技法	紙・リトグラフ
制作年	1957年
サイズ	37.2×52.4cm

瑛九のリトグラフの作品はそれぞれユニークで一度見ると強く印象に残ります。この旅人は何とか手に入りたいと念じてから長い時がたちある時、ふと閃いたヒントがきっかけで蒐集できたものです。瑛九の後援者の久保貞次郎の縁者の方から人手を介して分譲していただきました。

この作品は数が少なく瑛九のリトグラフの作品のすべてが収蔵されていることで有名な酒田市の本間美術館まで持参してこの作品と比べてみたことが思い出されます。この時自刻自刷りの作品の奥深さとその素晴らしさを感じました。

作家のその時々作品に対する思いが伝わってくるようでした。

作家略歴 瑛 九 (えい・きゅう/1911～1960年)

宮崎市生れ。日本美術学校中退。洋画家、版画家、写真家。前衛的、抽象的な作品で知られる。フォトデッサンを制作。1937年自由美術家協会創立会員。51年デモクラート美術家協会を結成。創造美育協会に参加。東京で没、48歳。(出典 わ眼)版

出品者 水口英男さん



作家名	一原有徳 (いちはら ありのり)
作品名	「 TUT3 」
材料・技法	金属版版画
制作年	1976年
サイズ	24×20cm

一原作品との出会いは、現代版画センターで仕事をしていた時に知ることになり、当時は全く何もわからずぐちゃぐちゃしていて気持ち悪く、何でこんな作品を作るのか疑問でした。

何年かするといつのまにか違和感がきえて、見る度に新鮮さを感じます。いろいろな金属を削ったり腐食して版を作り摺ります。全く独自の世界で、広大な宇宙を思わせたり、顕微鏡を覗いたようなミクロの世界を感じたりします。この作品はブルー一色で海面を思わせ、白く抜けている所は版に穴が空いており、それが奥行を感じます。

作家略歴 一原有徳(いちはら・ありのり/1910～2010年)

1910年徳島生まれ。1912年北海道に移住。尋常小学校を出てから小樽郵便貯金局に給仕の仕事を得ます。定年まで働き、その間絵を描き版画を作る。他に北海道の未踏峰の山に登るなど登山家で俳句や小説も書く多彩な人です。土方定一さんに評価され鎌倉近代美術館や海外でも展覧会をしています。2010年没。(水口)洋画家

出品者 太田貞雄 さん



作家名	島 あふひ(しま あおい)
作品名	「 枯れ花B 」
材料・技法	キャンバス、油彩
制作年	1984年
サイズ	100×80.3cm F40

枯れ花、今風に言えばドライフラワーである。花の持つ繊細さからは程遠く、枯れてもなお力強く生命力溢れる姿を生き生きと画がいている。壺の右下あたりに絵具が剥離しているように見えるが、壺の丸みを強調するため作意的に剥がしたのかもしれない。

作家略歴 島 あふひ(しま・あおい/1896～1988年) 徳島県生れ。徳島県立高等女学校卒。1924年川端画学校、26年前田写真研究所。27年から二科展に出品。33年婦人美術協会設立参加。36年女性画家7名七彩会結成。37年一水会展出品、46年一水会会員。47年二紀展に出品。66～67年資生堂ギャラリー個展。81年徳島県郷土文化会館で回顧展。東京で没、91歳。

出品者 鈴木忠男さん



作家名	中田日菜子 (なかた ひなこ)
作品名	「飼育」
材料・技法	絹本・墨・膠・日本画
制作年	2021年
サイズ	34.1×51.0cm



去年（2020年）11月の装幀画展（枝香庵：銀座）で初めて知った画家である、アートソムリエ山本冬彦の推薦であった（実際月刊美術12月号で推薦紹介されていた）、出品の「死者の奢り」（大江健三郎）を購入した。その後のグループ展を見て、今年4月の二人展（アンペルギャラリー：去年日本橋にオープン）に初日一番に入った、画廊の人かと思った若い女性は本人だった、まさか来ているとは思っていなかったのだ。話が出来た、絵画背景の布地を描いたりもしていますが、本物の布地は古いものなのですか、祖母のものだったのを使ってますとの答え、流石に金沢の地の利を感じた。日本画は高いイメージがありますが、今のところ安い値段を付けてますね、高くなったら買えなくなりますが。ここで選んだのが出品作品「飼育」です、必然なのか大江の小説題名だった、大江小説は初期作から「個人的な体験」までは読了したが、その後も10冊位は購入しているが読んでないまま。今度中田に会ったら大江の本をどれ位読んでいるのか聴いてみたい。礼状には「本作はボールパイソンの“ボール”が寝ている所を写生し、作品にしました。」とあった。偶然だが前回出品した古邨も金沢生まれだ。

作家略歴 中田日菜子(なかた・ひなこ)1995年(平成7年)石川県金沢市生まれ。
2018年金沢美術工芸大学日本画専攻卒後、同大学院絵画専攻修了、2021年同大学博士
後期課程2年。2016年第2回石本正日本画大賞展入賞。2019年からグループ展出品。

「コレクターの知れざる名品展」は、コロナ禍、延期され、
2021年8月12日～31日の20日間に開催期間を倍増し
て柏市民ギャラリー・パレット柏で開催予定です。



編集後記： 51回の放談会からこの62回までを担当させて頂き、丸3年が過ぎました。
途中58回から今回までの1年はコロナ禍による誌上でのみの放談会です。
放談会の主役はコレクターによって見出された作品達です。
コレクターの熱き想いは誌上を飛び出し皆様のもとへと届き、新たな発見や、感動を
もたらしてくれることでしょう。
私事です但し任期終了をもって、一旦このお役目とお別れします。
誌上放談会を絶えることなく支えてくださったコレクターの皆様に、ご覧いただいた皆
様に改めて感謝いたします。

発行：あーと・わの会
発行日：2021年7月吉日
編集：実行委員 あーと・わの会 放談会チーム
写真、編集、デザイン 井澤尚子
連絡先：事務局（堀 良慶） 〒277-0871 柏市若柴1-358
TEL 04-7134-8293 ryokeihori@yahoo.co.jp